

皆さんおはようございます。先ほど紹介いただきました私、西澤心（にしざわしん）と申しまして、こころという字で心と書きます。出身は兵庫県の宝塚で花組です。（笑）ウソですけども。

意外に姫路に近いです。2時間かかるかなと思いましたが、出遅れたので、ちょっとだけ車で飛ばして1時間半で着きました。皆さん都会の方は田舎の日本海の方で遠いと思うかもしれませんが、実は意外に近い、「お昼どこ行こうかな？ほのぼの屋に行こう」という感じで来てください。

私の肩書なんですけども、ここに書いてますように社会福祉法人まいづる福祉会というところで施設の名称がワークショップほのぼの屋です。そのほのぼの屋では施設長という肩書き、それから精神保健福祉士という肩書で仕事をさせていただいています。ワークショップほのぼの屋でたくさんの仕事をしているんですけども、そのうちの 하나가「CAFÉ RESTAURANT ほのぼの屋」というレストランをさせていただいております。

レストランの方では、一応支配人という肩書なんですけど、支配人って偉そうな感じがしますが、実のところはうちで働いている障害者のある方たち40名に支配されているほうです。ここ笑って良い所なんですけどね。非支配人でございます。通訳が難しいですね。すでにこのほのぼの屋というレストランで結婚式を挙げていただいたカップルが300組を超えております。そんな関係で、勉強をまったくしていなかったんですけど、急きょいろんな勉強をさせていただきながら、ブライダルプランナー、何をするかというと、結婚式のコーディネートをする仕事ですね。お二人と一緒に「どんな結婚式したいんですか？」から始まって、当日の運営をしていくという仕事です。

それでは早速話を始めたいと思います。最初に、共同作業所、姫路にもたくさんの共同作業所がありました。今はどんどん減ってきています。この共同作業所が誕生してきました背景というのは、障害の重い子どもたち、今から40年前というのは、就学猶予、就学免除というかたちで小学校に行けなかった。義務教育さえも受けることができなかった。そんな時代を経て、全ての障害を持っている子どもたちに教育が保障されるようになったのは今から36年前、1977年のことですね。それまで、就学できない障害の子どもたちのお母ちゃんたちは、役所に行きまして「うちの子どもは障害が重いから、学校に行くことを免除してください」「猶予してください」という申請を泣きながら書いていたんですね。本当は、子どもたちを学校に通わせたいじゃないですか。でも、そういう形で泣きながら、「猶予してください」「免除してください」、そんな時代がありました。

そんな中、「うちの子どもを学校に通わせたい」という運動がありまして、その運動の成果として、1977年に全国の養護学校に重い障害があっても入れるということになりました。それが共同作業所ができていく背景になります。

子どもたちは本当に喜びました。初めて家から出ることができた。初めて友達ができた。初めて字を覚えてもらえた。本当に子どもさんたち、親御さんたちは喜んだんですけども、残念ながら学校というところは卒業がございます。「卒業したら、また一人ぼっちでお

らなあかんのか…」「卒業したら、また家でじっとしとかなあかんのか…」皆の願い「何か活動できる場所が欲しい」「皆で集まれる場所が欲しい」というのが、この共同作業所が出来ていく背景にありました。それこそ、柱1本持ち寄って、全国各地に作業所がたくさんできていきました。

もう一つの背景は、卒業したら就職できるだろう、でも就職できるような企業はなかなかなかったということです。貧困な、今もそうですけど、障害者の施策というのがね、本当に貧弱なこの国の中で行き場所がなかった。そんな形で、小規模作業所、共同作業所のことですけれども、2006年には小規模作業所が5800箇所という数になってまいりました。いわゆる法定の授産施設、認可施設というのは1300なんですけれども、その何倍もの共同作業所ができてきました。それだけ、福祉の受け皿、法定施設が少なかったという背景になります。

そんな形で共同作業所がどんどん増えてきたんですけれども、共同作業所の中で私たちが障害をもっている人たちと一緒に築きあげてきたというのが働くことです。

作業所に行って、大人なんだから仕事しようじゃないか、初めての給料、その頃は本当に貧しかったです。1ヶ月働いて、数千円みたいな給料なんですけれども、その数千円の給料を、初めてもらって家に帰って仏壇に供えて、「おじいちゃん、この子給料もろうたんやで。」そんな形で給料の会話をしてまいりました。

いろんな作業所が各地にできましたね。一番最初は、名古屋にあります、ゆたか共同作業所が第1号。それから、和歌山県にはろう重複障害者共同作業所の第1号、1977年たつのこ作業所というのが誕生しました。今度は精神障害がある人たちが通える共同作業所、1976年の10月に東京の小平市にあさやけ第2作業所というのが誕生しました。そんな形で、さまざまな障害を持っている方、うちなんかはどんな障害があってもということで、知的の障害があっても、身体の障害があっても、精神の障害があっても、どうぞ利用してくださいね、という形でしていたんですけれども、ところによっては、ろう重複の作業所となり、知的障害者だけの作業所、精神障害者だけの作業所というかたちで、それぞれが特色を持って全国に増えていくわけです。

2003年、6025ヶ所をピークとしまして、2006年から2007年にかけてぐっと減ってまいりました。なぜ減ったかと言いますと、自立支援法という法律が施行されたからです。後で少しお話をします。これは後で紹介しますが、プレハブの写真、つぎはぎだらけのプレハブなんですけれども、これがもともとの私どものまいづる共同作業所で、中古のプレハブを安く譲りうけまして、この隣に清掃工場があったんですけれども、その工場の関係者がパネルを洗って、さすがに組み立てまでは大工さんをお願いしたんですけれども、本当に柱1本持ち寄って、お金もありませんでしたので、そんな形で1977年にオープンしました。

今はそこから移転してまいりまして、そのうちの一つがレストランほのぼの屋になっていくんですけれども、プレハブの時代に、まさか我々がレストランをするなんてことは、

とても想像つかなかったんです。今レストランをやっていますけれども、ほのぼの屋っていうところは、共同作業所っていう魂は変わっていません。

皆さんご存知だと思いますが、障害者の権利条約というのが2006年に採択されました。障害者の権利条約はだいたいご存知だと思うんですが、一番最初に言い出したのは、メキシコの大統領なんですね。メキシコの大統領が、「うちの国はたいへんやから、障害者の権利条約っていうのをなんとか作ってくれへんか。」って、たぶん大阪弁じゃないと思うんですけど、一生懸命言いました。メキシコの大統領が国連で提案をしたんです。ところがその時、他の国が冷たかったんです。反応が冷ややかだったんです。特にヨーロッパの人たちは「なんでそんなんつくらなあかんねん」という冷ややかな反応だったんです。でもね、その反応はレベルが違うんですよ。「なぜ、障害者だけの条約を作るんだ?」「障害のある人も、ない人も一緒のはずでしょ?人権っていうのは。だからあえて障害者だけの条約を作るのは、逆に差別なんじゃないか。全ての人の人権条約でいいんじゃないか。」だから、冷ややかな反応だったんですね。それでも、メキシコの大統領はがんばりました。「あんたらのところはええわいな。だけどメキシコはそんなこと言うところではないんや。貧しいし、そんな中で障害を持っている人は本当に大変なんや。だから、なんとか障害を持っている人の権利条約をこさえてくれや。」と熱弁をふるいまして、それにおかれて、ヨーロッパの人たちも初めはそんなことを言っていたんですけども、「しゃあないな。それではわかった。」と、「全ての人の権利条約の中の、障害を持っている人の権利条約を作ろうじゃないか。」という形で討議が始まっていった。権利条約特別委員会というのがつくられてまして、全世界から、障害を持っている人が半数近くの委員になりまして、国連に集まって、この委員会をずっとやってまいりました。

「こんな条約にしたらどうだ。」「いや、障害者だけ特別はあかんのちゃうか。」

「今までうちの国は、障害者には上から恵むだけのもんやったよ…それは、全世界変えていこう。ケア、保護ではなく、権利として同等なんだよ、と考えようじゃないか。」と、討議を重ねていきまして、2006年の12月、特別委員会で、ごめんなさい、8月の特別委員会で第8回、最終の権利条約の案がまとまりました。世界の委員さんたちが話し合いをして、やっと形になったわけです。本当に、喜びました。大きな声で、視覚障害の北欧の方やったと思うんですが、その女性が「**Nothing About Us Without Us!**」と叫びました。意味は「私たちのことを私たち抜きで決めないで!」なんですね。その後、会場にいる議員さんでハグをして、ようやく権利条約ができたことを喜び合いました。その後国連総会で192ヶ国が全会一致で採択されて権利条約ができました。

ところが、権利条約ができた同年に、日本では障害者自立支援法ができたわけです。先ほどの、保護とか、ケアとかいうんじゃない、一人の人間として他の者と同等、そういう権利条約ができたにも関わらず、自立支援法ができて、障害が重ければ重いほどたくさんお金を払いなさいよ。うちなんかで言うと、仕事をしに行くのに、お金を払って仕事をしに行く。おかしいでしょ?障害が重ければ重いほどたくさんのお金をサービスを受けなければ

ならない。受けたいなと思うんだったらお金を払ってくださいよってというのが、この自立支援法の根本的な仕組みやったわけですね。自立支援法は本当に悪いことばかりやったんですけど、一つだけ良いことがありました。多くの障害者団体が、今まで仲が悪かった障害者団体も含めて、「自立支援法反対！」ということでひとまとまりになったことなんです。これだけが自立支援法の良かったところだと思います。

東京の日比谷に集まってみんなが「もうやめようよ 出直して！」と、毎年のように集会を繰り広げてきました。本当にたくさんの団体からたくさんの方が来てですね、この集会で自立支援法の廃止を訴えてきました。さらには、この応益負担というのは憲法違反だということで、この自立支援法について障害持っている人たち当事者が訴えを、訴訟をおこしていきました。司法の場で争おう！ということで、全国14の地方裁判所から71人の障害を持っている人たちが「憲法違反だ！」というところで、この訴訟を起こしていきました。

もう政権がまた代わっちゃったんですけども、政権交代があって、民主党に移ったこともあるんですけども、2009年に自立支援法については廃止します、という約束をしていただきました。その後、先ほど提訴しました原告たちと、国が基本合意という約束を交わしました。国と障害を持っている人達が約束を交わしました。どんな約束かと言いますと、「自立支援法を廃止して、新しい法律を作りますよ。憲法に反すると訴えた障害をもっている人たちの思いを真摯に受け止めて、心から反省の意を表明します。」つまり、国が謝ります。ごめんなさいを言う。それから「障害者制度改革推進本部を設置して、原告弁護団の要望を考慮しながら、新しい制度改革を進めますよ。」という約束が大きな中身ですね。改革を始めていきますということで、この3つの法律ができました。一昨日、障害者差別解消法という法律が成立したわけですけども、まずは障害者基本法、以前からあったんですが、非常に薄っぺらい法律だったんですね。これを国連の権利条約に見合うようなしっかりとした法律にしようやということで、制度改革推進会議のメンバーが推進本部、政府に意見書を提出しました。その意見書は、素敵な内容だったんです。本当に権利条約に劣らない内容だったんですけども、残念ながらできたのは、全部意見書が通っていたら100点満点なんですけども、障害者基本法の抜本改正では、私的に点数つけたら35点くらい、ギリギリセーフ。落第はしてないかな〜ぐらいの点数。でも、ちょっと進んだんですね。次に障害者総合福祉法という法律、この骨格提言を提出したんですね。自立支援法に代わる新しい法律ということでその骨格について提出をしていったんですけど、皆さんご承知の通り、障害者総合支援法という法律になりました。これは、名前がちょっと変わっただけ、自立支援法と基本的な仕組みは全く変わっていません。でもちょっとだけ範囲が広がった、難病が含まれた、などがありますので、これは点数をつけるとしたら、100点満点で2点くらいですか。本当に残念なことになってしまいました。そして今、差別解消法が成立しました。これは本当の意味で言うと、点数つけるんやったら30点くらいかな〜。それでも3つの法律ができたので、ギリギリの最低ラインですが、権利条約を批

准、批准っていうのは後でお話ししますが、「日本の国がこの権利条約で頑張ってやっていますよ。」ということなんですけども、最低の条件がこの3つの法律が成立したことのできたのかな、と思います。

先ほどの権利条約の批准の話です。日本では一番もとになる日本国憲法があります。上位法といいまして一番大事な法なんです。それで、基本法ですとか、総合支援法ですとか、これは一般法っていうんです。権利条約を批准すると、憲法と一般法の間に位置づくんなんです。ということは、憲法と矛盾するわけにはもちろんいかないんですけども、一般の法律は権利条約に反して変なことを書くわけにはいかないんです。この権利条約に基づいて国内法を変えていこう。そして権利条約を批准しよう。今まで多くの障害者団体と手をつなぎながら障害者をめぐる今の法律を変えていこうじゃないかと一生懸命やってきました。

先ほど言いましたように、点数をつけると残念な点数ですけど、それでもギリギリの状況が揃いました。今度は批准してもらって、この権利条約に基づく法律に今から変えていこうじゃないか。というのが、これから大事なところになると思います。

権利条約なんですけれども、合理的配慮という言葉があります。それから他の者と同等、どこで誰と暮らすかは、自分で決める。当たり前のことが書いてあるんですけども、残念ながら条約を決める人たちっていうのは、あくまでその当たり前の状況でないことがたくさんあります。でもその当たり前になっていくっていうのが権利条約ですので、権利条約を受けて、皆さんと手をつなぎながら一緒にやっていきたいなと思っております。

もう一つ、**Decent Work** という言葉、先ほども司会の方から少しお話いただきましたけれども、1999年、20世紀の終わりごろILOという国連の組織なんですけれども、国際労働機構と訳します。ILOの総会で、国連の中の労働を束ねているILOなんですけれども、その総会で、「21世紀、今世紀の目標は、**Decent Work** にしましょう。」と決定したんですね。**Decent Work** というのは、「働き甲斐のある人間らしい仕事、人間らしい生活を継続的に営める人間らしい労働」と訳されています。

ややこしいので、私は、誇りある労働、という風に訳をしております。それから、価値ある労働。ノーベル文学賞をもらった大江健三郎さん、英語が堪能でかしこい方ですけども、大好きな英単語の一つがこの、**decent** という言葉なんだそうです。大江健三郎さんによりますと、なかなか奥が深くて日本語に訳すのは難しいんですけども、あえて訳すとしたら、「品格ある」と訳したいそうです。ということは、大江健三郎さん風に言いますと、「品格のある労働」と訳すことになります。後でほのぼの屋のところで、**Decent Work** の話につながりますので、この言葉覚えていただけたらなと思います。

ところがですね、これはきょうされんで一昨年調査した状況なんですけれども、いわゆる障害者施設等で働いている障害者のなんと56%が年収が100万円以下ということでした。年収とは、障害年金ですとか、生活保護ですとか、あるいは給料、全部足して、56%が100万円なかったんですね。なんと、99%の方が年収が200万円以下。いわ

ゆる200万円というのは、日本では **working poor** とされる方たちの年収なんですね。障害者施設に通う、そこで働く人たちが99%200万円以下、10人のうち6人が100万円以下で生活をしている。そういう実態が明らかになりました。

障害を持っている人達の制度は変わってきたんだけど、暮らしぶりっていうのは、先ほども言いましたように数十年変わっていない。いろんな制度ができたりだとか、いろんな法ができたりだとかはあるんだけど、暮らしぶりは数十年変わっていない。そんな状況がある。だから我々は、援助者と言われる人たちなんですけれども、やっぱり、しっかりと働ける、所得が得られ生活ができる、その環境というのを整えていくことが我々の仕事なんじゃないかと思います。いくら制度が充実しても、100万ない中で生きていくのは、日本という国では厳しいです。なんとかその制度を作っていくこと、それから働く環境、暮らしていける生活の環境、これをみんなで作っていかなくてはいけないんじゃないか、それがあって初めて、**Decent Work** が実現するんじゃないかと思っております。

さて、そんな障害者をめぐっての状況があるわけですけども、今から、ほのぼの屋の話をしさせていただきます。

最近、ありがたい話で全国あちこちからお声をいただいて、こんな講演をさせていただくことがあったんですけども、「どこから来たんですか?」「京都の日本海側です」「え? 京都って海あったの?」って、東北とか、九州の方やったら、京都の地理がわからないですね。「京都っていうたら五重塔があるところやろ?」「そうやけど。ず〜っと北の方に行ったら海がある」「ないやろ〜」と言われるので、日本地図を用意しております。

「京都はここです。舞鶴は小さくなっていますが、ここですよ。」それでもなかなかわかっていただけない方があるので、「京都の一番ロシアに近い所です」と言うてます。

私の住んでおります舞鶴なんですけども、京都の北部でございます。西舞鶴というエリアと東舞鶴…ごめんなさい、印刷抜けてるかもしれないです。この画像と違うかもしれません。西舞鶴というのは城下町。細川幽齋さんという方、戦国武将ですね。お城を築いた。今は城門だけがあるんです。姫路城みたいな立派な門じゃないです。門だけちょろっとあるんです。その城下町でございます。地方都市ですから、商店街はシャッター閉まっているところの方が圧倒的に多いぐらいですね。5軒に1軒くらい開いている感じ。人通りもまばらでそんな厳しい町が西舞鶴。東舞鶴は今から100年少し前に、海軍の鎮守府というのが置かれまして、海軍の大きな基地ができたわけです。本部みたいなものですね。そこから、軍港として発展してまいりました。もちろん私は生きてないんですけども、日露戦争でバロチック艦隊を打ち破ったのが、この舞鶴から出て行った海軍やったそうです。そんな物々しい町なんですけども、今も海上自衛隊の船が停泊しております。

お聞きになったことありますか。イージス艦。これが舞鶴に4隻あるんです。だいたいレーダーを積んで、ミサイルが飛んできたら、船がミサイルを発射して、飛んできたミサイルを撃ち落とすことができる、ものすごい最新鋭の船なんです。すごい高い船なんですけども、それが舞鶴に4つあるんですね。どれくらいそのイージス艦がすごいかって

いうのはわかりにくいんですけども、自衛隊の見学に子どもさんが来ます。自衛隊の方が案内してくれるんです。見学後に「おっちゃん、イージス艦ってどんだけ強いん？」子どもらしい質問でしょ。自衛隊の方は目をキラキラさせて「いい質問だね。イージス艦はね、どれだけ強いかというと、イージス艦のないよその国の海軍の船が100隻来たって、イージス艦1隻で滅ぼすことができる。それくらい強いんだよ。」そんな怖い船が舞鶴に4隻あるんです。一番最初に狙われるの、舞鶴でしょ！っていう感じです。怖い所です。ついでに言うときますと、ここから、ほのぼの屋から東に10キロ行った所に、今再稼働が検討されております、高浜原発があります。それから、20キロ行った所に、もうすでに再稼働してます、大飯原発があります。それから、美浜原発ですとか、敦賀原発とか、福井県原発が20キロ、30キロといった所にありますから、舞鶴、いろんな意味で非常に危ない所なんですけれども、レストランはやってますので安心して食べに来てください。まず、皆様から避難していただけるように段取りします。

そんな舞鶴ですが、人口は89,000人です。戦時中は海軍があった関係で30万人くらいの人口だったんですけども、どんどん減ってまいりました。地方ですので、若干高齢化が進んでおります。今、日本では5人に1人が高齢者というのがだいたいなんですけど、舞鶴は4人に1人がお年寄りになります。若干高齢化が進んでいるのかな。有効求人倍率、これは10人仕事したい人がいて、ハローワークで10社求人があります、となると、求人倍率は1.0倍。舞鶴は0.4倍です。だから、10人仕事したいといっても、6人は仕事に就けない状況なんです。正社員求人にいたっては、0.2ありません。だから、正社員になりたいと10人が手を挙げて、なれるのは1人か2人という状況です。一般の求人でこういう形ですから、障害を持っている人が正社員になりたい場合も、さきほどの10人と勝負していかなくてはいけないんですね。で、なれるか、なれないか厳しい状況。これが今に始まったことじゃなくて、バブルの崩壊後ずっと続いています。従いまして、完全失業率も高く、生活保護の受給者も多いです。だからといって障害を持っている人たちが多いかというと、全国平均から見ますと、人口比から見ますとだいたい平均位の数かなと思います。

そんな町、舞鶴に今から36年前、先ほど写真をみていただきました、まいづる共同作業所が誕生しました。背景は、先ほど申しました障害者教育の義務化の前に、京都では与謝の海の学校というのが今から40年くらい前にできて、義務化よりも先に通えるようになったんです。でも卒業があるわけです。なんとか、卒業後の活動の場が欲しいというのと、これは舞鶴の特殊事情なんですけれども、そのころの精神科の医療というのは入院中心主義。今あまり変わっていないんですけどもね。ちょっと精神疾患を患うとだいたい山奥の私立の精神病院に入院させられる。一旦入院させられるとなかなか出ることができなかった。その精神病院の建設ラッシュのピークが1970年代くらいやったんですね。なぜ、建設が進むかっていうと、儲かって、儲かってしゃあなかったんです。当時ね、ひどい言葉があります。「患者は固定資産」なかなか退院できないでしょ。入院したら、どん

どんお金が入ってくるわけです。精神科っていうのは、精神科特例があつて、あんまり医者がたくさんいないです。看護師さんもあんまりいないんです。入院してもらったら、時々お金ははいつてきて、あまり使わんでいいから儲かるぞ、という時代やったんです。それが当たり前やったんですけど、そんな中に舞鶴に当時で言うとちょっとヘンな医者か何人かおりました。何がヘンか。今やったら当たり前のことですけど、「そんな入院中心主義の医療ではアカン」と「地域の中で通院をしながら、リハビリがはかれるようなそういった活動をしていきたい。そのためには、やはり昼間の活動の場所がほしいな。」この2つの背景が一緒になりまして、このまいつる共同作業所が誕生いたしました。ですので、我々の開設理念というのは、どんな障害があつても、というかたちで、もちろん聴覚障害の方も含めて、希望される方はすべて受け入れていこう、受け止めていこうということで、今まで36年やっています。うちは断ったことないです。来る者拒まずでね。利用したいということやったら、とにかく利用してもらおう。障害があろうがなかろうが、困っているんやったらおいでよ、というかたちで来てもらってました。

だから、知的障害の方、身体障害の方、精神障害の方、それから法律のはざままで手帳をもらえない人たちもたくさん、その中にはいました。オープン時には、精神に障害のある方たち10名、年度途中の開始でもありましたので、そんなかたちでスタートしました。スタッフが3名、3名言うてもね、みんな素人なんです。福祉とか、障害者とか、ぜんぜん関わりのなかった人たち3人で始めていくわけです。何をしたいのかわからへんままで、見切り発車でオープンしました。毎朝、このプレハブに歩いて通ってきます。で、朝の会をします。「おはよう。みんな元気か？」とか言って。「ほな、掃除しよか。」プレハブの掃除を毎日していたんですね。で、途中で休憩いれて、また掃除して、お昼前になったら、「ほな、お疲れさんでした。」と終わりの会をして、「ほなさいなら、また明日。」それを何日か繰り返していたんですけども、3、4日たった時点でですね、障害のある人たちの中の一人が、「なんで毎日掃除なんや。俺な、医者に言われて来たんやけど、仕事があるって聞いた。仕事があるから作業所とちゃうんか。仕事せんと毎日掃除、掃除が仕事か？」といわれ、職員の一番最初の仕事らしい仕事が、仕事を探しに行く、という仕事でした。

市内を走り回りまして、やっと仕事をいただくことができました。家具の下請けの部品を作る仕事をちょうだいすることができまして、やっと仕事が始まります。「よし、仕事やからな、今まで半日で帰ってたけど、明日から弁当持ってきて、一日仕事しようやないか。」ということになりました。そのお弁当の初日の日なんですけども、午前中の仕事が終わって、2階でちょっとした部屋がありまして、「2階で、お弁当広げといて～」言うて声かけて、職員はお茶を沸かして持ってあがってみますと、けっこう広い部屋やったんですけども、皆が壁を向いて、全員が壁を向いてお弁当を食べていたんです。普通、お弁当食べる言うたら、多少は向き合つて食べるんちゃうか。精神障害の人がコミュニケーションが下手や言うのは聞いてたけど、これはどういうことや。とその時本当に職員は大きなショッ



クを受けたわけです。

ところが、仕事っていうのは不思議な力があるんですね。仕事っていうのはなんらかの形で向き合わんとできないようになってるんですね。「ちょっと、そっちの道具とって～な」とかね。「材料、こっちにまわして」とか。「これで合うとんやろか?」「ちょっと点検して～な。数かぞえて～な。」とか、そういうやりとりを仕事の中で自然とするようになっていくんですね。そうやって、2ヶ月、3ヶ月と経つうちに、徐々に、弁当を向き合って食べられるようになって、それどころか、会話まで楽しめるようになっていく。人間として変化をしていったんですね。当時の職員は確信を持ちました。働くってことは、本当に人間をたくましく成長させていくんやなあって。以来、私たちは36年、働くということにこだわってやってまいりました。

10名でそんな形でスタートしたんですけれども、あっという間に50名。無認可の共同作業所です。小規模作業所です。小規模のくせに大規模な作業所です。50名という人数になりました。なんとか、先ほども紹介しました、法定施設にしていこうじゃないかということで、15年かかったんですけれども、念願でありました、社会福祉法人格を取って、まいづる作業所という新しい鉄筋コンクリートの施設を作りました。当時は知的障害者の授産施設が法律名称でございました。ところが、このまいづる作業所に入れるのは、知的障害の手帳を持った人だけなんです。当時の法律は知的障害は知的障害の施設、身体の方は身体の施設、精神の方は精神の施設、total的に利用することができなかったんです。しかたがないので、まいづる共同作業所に身体の障害がある方、精神の障害がある方はのこることになりました。14名は先ほどのプレハブですね。元気な部隊が40名ほど、このまいづる作業所に移ったわけです。

にぎやかだったのがおらんようになりましたんで、広くなりました。50人いるころは、プレハブは狭いと思いましたが、14人になりますとね、仕事しながら「いや～なんか、静かでええな～」「仕事してても、ひじ当たらんで～」という感じで、のんびりほっこりと再スタートを切っていくわけなんですけれども、14名で仕事するのはつかの間で、あっという間に、20名、30名、40名という大所帯に変わっていきました。

先ほどもいいましたが、背景はバブルの崩壊なんです。せつかく共同作業所で力をつけて、一般企業に就職していった人たちが、のきなみリストラとか解雇とかあるいは会社自体がつぶれてしまって、行き場を失って共同作業所に戻ってくる。戻ってくるだけやったらともかく、もともと一般企業で働いていた障害のある人たちが、仕事を失って、ハローワークに相談に行く。あろうことかハローワークが共同作業所を紹介する。我々は連携取ってるつもりやったんです。こっちから「就職なんかしてもらえんやろか」ってハローワークと連携をとってたつもりなんですけど、反対に連携をとられてしまいました。ハローワークからうちにくるといふ。その当時、作業所での給料は多い人で2万円ぐらいなんです。そんなところ、ハローワークが紹介したらあかんやろって思うんですけど、そんな状況になっておりました。所帯が増えて50名、これは物理的に限界やぞいいうことで、新

しい作業所を作ろうじゃないかとなりました。

この写真に写っております、古本屋をみんなで立ち上げていくんですけれども、ここを作っていくまでに、まいづる作業所と、まいづる共同作業所とあわせて80数名の人たちにアンケートをとりました。一つ目のアンケートは「新しい作業所を作ろうと思う。新しい仕事をしようと思う。今までやったことない仕事やで。みんなどんな仕事やってみたい？」

もう一つは当時多い人で給料2万円、少ない人で3千円くらいの給料だったんですね。その中で「皆さんはどれくらいの給料が欲しいですか？」という2つの質問をさせていただきました。

「どんな仕事をしてみたいですか？」8割くらいの回答が「お店屋さんやりたい」だったんですね。「お店屋さん」と書いていたわけではないんですよ。たこ焼き屋、お好み焼き屋、カレーショップ、うどん屋、ラーメン屋、寿司屋、レストラン、みんな食べたいもん書いとんちゃうか。とにかく、お店さんが圧倒的多数占めているわけです。なんやろこれは？ やっぱりみんな社会経験乏しいから、商社とか、コンピューターのプログラミングいうてもわからへんよな。だから、町歩いてて、車で通っててふと目に入るものにとびついとんちゃうか？なんて言うてたんですけど、いや確かにそうかもしれんけど、でもよう考えてみよ。彼らにとって、彼女たちにとって、お店屋さんっていうのは一番身近な仕事なんちゃうか。ということは、だれにとってもこれは身近な仕事なんちゃうか。お店屋さんええかもしれへんな。そういう教わり方をしました。

もう一つの質問、「どれくらいの給料があったらやっていけますか？」これは統計とるのが嫌になるくらいばらつきました。「月に100万円はいる」から「今の3千円の給料で十分です」という回答までほんとにバラバラやったんですね。こんなん平均出しても意味ないな、と言ってたんですけど、その中で、障害者が共同生活をしておりますグループホームからこの共同作業所に通ってきている2人が、「4万~5万円欲しい」とかいてあったんですね。2人に「4万か5万って書いてたんやけど、どうゆうことやろ？」話を聞きました。

そうしますと、「よう聞いてくれた。障害年金の2級もつとんやけど月にだいたい6万ちょいや。共同作業所の給料が1万ちょい。ひと月7万でやっていかなあかん。ところが、グループホームの家賃が2万2千円、グループホームの食費がだいたい1万円、共同作業所に行って弁当頼んだら月8千円かかる。後の支払いがなんぼかあって、給料前、年金支給前いうたら、一銭も残ってへん。缶コーヒー1本買う金も残らへん。これではやっていけへん。そやけど、給料が4万か5万あったら、年金とあわせたら10万超えるやん。10万超えたら将来のこととかも考えられるのにな〜。」って言うんですね。

そんなことで、当時、第2まいづる共同作業所って言ってましたこの古本屋なんですけれども、一つは、5万円の給料を目指そうやないかという目標、それからもう一つ、みんなの願いのお店屋さんを実現していこう、というこの2つの目標を掲げてみんなで立ち上げ

ていきました。

ところが、舞鶴みたいな田舎でも古本屋、ブックオフさんですとかの大手の古本屋さん  
がぼちぼちできてきてるところやったんですね。ですので、10数名の利用者さんに5万  
円の給料を払うだけの古本の売上っちゃうのはなかなか難しいっていうのは、なんぼ計算  
が苦手な私でもわかりましたので、この古本屋を拠点にしながら、いろんなところに出か  
けていくという仕事、今こういうのを施設外就労というんですけれども、いろんな仕事を  
取ってまいりました。

例えば、Aさんの1週間で言いますと、Aさんは、月曜日は舞鶴市のリサイクルプラザ  
というところで、燃えないゴミが流れてくるんですけども、その仕分けをする部屋を、  
ラインをいただいているんですけども、そこで一日仕事をします。火曜日の午前中は古  
本屋の店番をします。午後は、舞鶴市民新聞というミニコミ紙があるんですけども、そ  
の新聞配達に出かけます。水曜日は大きな工務店の工場に行きまして、天井裏のパネルを  
釘を打って作ります。木曜日は板ガラスの工場の中に入って、片づけの仕事をします。そ  
んな形で、本人さんの希望に基づいて仕事をコーディネートしていきました。

あるメンバーBさんは、「俺は毎日は無理やけど、月、水、金でやらして。」「ほな、月、  
水、金でいこか」とかね。新しく入ってこられた方、まだ自信がないから、「週1日、2時  
間から始めたいと思います。」「わかった。週1回2時間から始めよか」…「2時間ちょっ  
と慣れてきたから、4時間働いてみよか」…「6時間働いてみよか」…「1日だけやなく  
て2日にしてみよか。…3日にしてみよか。」みたいなことを、本人さんと相談しながら、  
いろんな仕事をコーディネートしてまいりました。

半年が経過した頃に、週に5日来てる人の平均なんですけれども、当初の目標であった  
5万円の給料が払えるようになりました。そうしますと、彼らの生活面が微妙に変わって  
くるんですね。1年365日オレンジ色の毛玉だらけのジャージをはいている子がいまし  
た。毎日同じズボンです。上着も1枚か2枚とつかえひっかえでね。服装に無頓着という  
よりも、清潔感がどうなんだろう？という方がいたわけです。その子、古本屋の店番を中  
心にしてたんですけど、夏場になりますとね、その彼から、なにやら、かぐわしい香りが  
店内を漂うわけです。「もうちょっときれいにしてくれへんかな〜」と言おうと思うん  
ですけども、彼は母親と二人暮らしで生活保護を受けながらギリギリの生活してたん  
です。シャワーがあったんで、「古本屋のシャワー浴びといで」は言えたんですけど、なか  
なかね、服装までは言えなかったんです。

その彼に、初めて6万円の給料を手渡せたんです。私思い切って彼に言いました。「一緒  
にズボン買いに行かへんか」で、彼と一緒に舞鶴で一番大きなショッピングセンターに出  
かけていきました。なんで大きなショッピングセンターかと言いますと、彼の体重が11  
0kg。ウエストが110cm。その時舞鶴で大きいサイズコーナーがあるのが唯一そこだけ  
やったんで、迷わずそこへまいりました。当時25歳の彼、生まれて初めて、6,800  
円でGパンを買いました。私は、そのズボンを買うてるのを横で見ながら、もう、うれし

くてね。泣きそうやったんですよ。人の給料で人がズボン買うてるのを見て泣くのもへんなんですけども、「帰ろか」と言いますと、「いや、ちょっと待ってくれ。もう1本ズボン買うわ。シャツも買うわ。」全部で2万円くらい使って買いました。給料の1/3が飛んでしもたわけです。買いすぎかな〜と思ったんですけども、彼は機嫌ように帰って行きました。

私は古本屋の方に戻りまして、残ってますスタッフ、メンバーにお願いをしました。何をお願いしたかという「明日、きっと彼は新しい服を着てくると思う。彼を見たら『素敵だね。』って言ってあげてね。」と言ったわけです。

「え〜？そんな、素敵なのじゃないやん」「あんたが言うんやったら、しゃあないから言うたるわいな」うちのメンバーはそう言うてたんですけども、ところが翌日現れた彼は、そんなこと言うの必要ないくらい見事に着こなしていたんですよ。もうまさにイメージチェンジです。みんなも「ええよ」みたいなことをさりげなく言ってくれておりました。彼はそれを聞きながら、「え？そうか？」と照れていたんですけども、その後、彼はファッションに目覚めて行きました。丸坊主にする、4ヶ月、5ヶ月伸ばす、また丸坊主にするのが、彼のヘアスタイルやったんですけども、これも生まれて初めてです。スポーツ刈りの伸ばしたようなおしゃれなカット、その当時の流行のカットをしてまいりまして、おまけにですよ、ムースとくしを買ってですね、髪の毛を整える、おしゃれな25歳の青年に変わっていったんですね。私は、彼は障害があって、服装に無頓着、清潔感も障害されてしまっているんじゃないか、と思ってたんですね。でもそうじゃなかった。服装、文化を楽しむだけの生活のゆとりがなかった。わずか5万、6万の給料なんですけども、彼の生活の幅を広げることができたと、彼を見て本当に思いました。

別のメンバーですけども、5万円の給料以前の頃ですね、私、名前が心といいますので、皆は「心さん」とか「心ちゃん」とか呼ぶんですけども、ある男性が、半分涙目で「心さん、頼むさかいにまた飲み連れて行ってえな」と訴えてきました。お酒を飲み連れて行けということなんですね。その懇願してるのをみて「ほな、何人か声掛けといて。休みのまえの日にでも行こか」そして、スナックのあるところに出かけていきまして、水割りをいただいて、カラオケを歌って、機嫌ように帰るなんてことを、何回かしてたわけなんです。

みなさんお気づきでしょうか。お分かりでしょうか。「連れて行ってえな」「連れて行く」という関係においてはですね、支払いは全部私なんですよ。ところがですね、5万円、6万円の給料が払えるようになりますと、彼らの言い方が変わりました。涙目で訴えるように「心さん〜頼むわ〜」って言うてた彼がですね、「心さん、飲みに行こか」に変わるんですね。「行こか」「行こか」で行きますでしょ。するとね、割り勘になるんですよ。その時も割り勘か〜と思って、泣きそうになったんです。よう泣くんですわ。最近はどうやら彼ら気が付いたみたいですよ。「西澤を誘う必要どこにもない」彼らだけで出かけていきます。ちょっとさびしいですけどね。また、飲み屋で出会った方に、サッカーのサークルに誘っ

でもらったりとかね。カラオケの愛好会みたいな会にいたりとか、大人としての社交範囲っていうのを、わずか5万、6万で広げていったんだと感じます。

当時、古本屋の中で勉強になったことっていろいろあるんですけども、その中の一つがですね、お店屋さんっていうのは誰も入りやすいですよ。本を買うのかなと思ったら、「ここ作業所なんやって？実はうちの家族にこんな人がおって、困ってんねん。」と、突然相談されてくるんですね。あるいは、障害を持っている当事者の方が仕事の帰りに自分で、「あんな、今わし、働いてんねんけど、今の親方がきついからな、もう仕事辞めようか思うんやけど、あんな、どう思う？」という風に、毎日いろんな方が入れ替わり立ち代わり、本を売るより、こっちの方が多いくらい、いろんな方が来られるわけです。なんなんやろ？って考えたときに、お店屋さんって入りやすいんですね。土日もやってますし、夜も7時半まで開けていました。本買おうかな～みたいに入ってきて、実は、みたいな形で話がしやすい。ところが、例えば共同作業所でね、「いつでも相談に来てくださいよ。」と言ってたんですけど、なかなか、ちょっと行こか、とか、ちょっと寄ろか、とかにならない。市役所ですとか、保健所っていうのはね、障害を持っている人たちの相談窓口になると思うんですけど、お役所ってところは、遅くまで仕事してる方もおられるかもしれませんが、9時～17時やし、土日はやってないし、保健所にいたっては、舞鶴だけかもしれませんが、「心の健康相談 毎週木曜日 要予約」って書いてあるんですね。そんなんね、心の健康の相談に行くのに予約してって。木曜日しかあかんわけです。そんなん誰が行きますかいな。予約入れてまで行くって言うのは、よっぽど相談慣れしてるかよっぽど切羽詰まっているか、ちょっと寄ってということには、なかなかない。それも含めて、我々も今まで「いつでも来てくださいよ」と言ってたけど、なかなか、来れない状況を作ってしまったん違うか。僕ら一生懸命、「バリアフリー」と言いながら、案内施設の案内側に、共同作業所の中にバリア作ってしまったん違うか。そんな反省もいたしました。

そんな風にやっていたんですけども、恐ろしいもんですね、彼らのネットワークっちゃうのは。どんどん広がっていくんです。「今度できた作業所、けっこう給料良いらしい」利用希望が毎日のように来るわけです。うちは断ったことがない、とにかく来てもらったら、新しい仕事を探さなあかんわけです。5万円払えるだけの仕事をなんとか探してくる。そんなん走り回っているんですけども、どんどん利用希望が増えてきて、これはらちあかんぞ、ということで、相変わらず企業に就職できない状況はありましたので、今私が勤めております、ほのぼの屋をみんなで作っていこうじゃないか、ということで、障害者福祉連続フォーラムを仕掛けました。

皆さんにお集まりいただいて、この地域に障害がある人たちが活動できる支援があれば、みんなが当たり前でやっていけるか、みんなで話し合ひましょう、検証し合ひましょう、という集まりを持ちました。行政の方にも来ていただき、他の施設の方にも来ていただいたり、民生委員さんですとか、多くの市民の方に来ていただき、みんなで考えようじゃ

ないか、考えましょう、という集まりを作りました。それだけではインパクトも弱いので、ネームヴァリューのある有名な先生にも来ていただいて、なんでこんなすごい人呼べるねん、ということで、舞鶴市にびっくりしてもらおう作戦だとか、いろんなかたに来ていただきました。目標は、この障害者福祉連続フォーラムを成功させて、ほのぼの屋を作ろう！だったんですね。結果的にこれは見事に当たりまして、何が良かったかという、障害を持っている人自身が、壇上で自分のつらかった過去、現在、未来を発信してきたことです。毎回3人来ていただき、毎回のように新聞報道されて、そんな中で結果的にこのフォーラムの成果ですけれども、施設建設の、ほのぼの屋を作っていく、行政的な了解をいただくことができました。

さあ、やるぞ！作るのはいいけど、お金どないするねん！全部で2億5000万かかると。その当時、国と京都府が半分、あと半分は自分らで用意せなあかん。1億2600万どないするねん。舞鶴市、なんとか出してくれ。8600万出してくれ！と要望書を出していくんですけども、百何十ページのあるA4の要望書、そこには日本の障害者の状況から、精神障害者の歴史から、延々書きまして、表には8600万くれ！と入れまして、それを市長に手渡しました。120ページの大論文なんですけども、市長は「全部読んで」と言うてくれましたが、残念ながら、8600万はでなかったんですけども、4600万舞鶴市が負担してくれることになりました。4600万も満額は出なかったんですけども、とても大きいです。今までそんな金額を障害者福祉に出してくれたことないんですけども、4600万出してくれることになりました。120ページの論文が300ページやったら、8600万出たかな？そんなはずはないですけど。

4000万借金して、残りの4000万は自分らで作ろう！ということで、こつこつ貯めていたお金と、市民からの寄付をお願いいたしまして、4000万の現金を積み上げて、建設に入りました。今から11年前になりますが、2002年の4月にワークショップほのぼの屋、それから、障害者地域支援センターほのぼの屋という2つの施設が1つの建物に入っているというかたちでオープンをいたしました。

ここを作っていくコンセプトというのは、障害者だけが利用できる障害者施設というのはやめよう。一般市民が利用できるものにした方が、障害を持っている人たちも利用しやすいのではないかな。じゃあ、障害者施設作るのやめて、レストラン作ろう！ずっと前から温めていました、レストランのプランを持ってまいりまして、レストランを作ろう！ということで、ほのぼの屋をつくってまいりました。

ここから10分程、ビデオをご覧いただきたいなと思います。

～レストランほのぼの屋ビデオ開始～

舞鶴湾を望む丘の上に、その店はあります。フレンチレストランほのぼの屋。

料理と景色、抜群のロケーションで週末には行列が並ぶ人気です。

実はこの店、一般的なレストランと違う点があります。それは、ここが障害者施設だということです。およそ20人の障害者が施設の職員とともに働いています。

この男性は、脳性マヒで体が思うように動きません。

この男性には、知的障害があります。

(客)「清潔感があって落ち着きます。」

「一生懸命仕事されていますね。一生懸命おもてなししてさせていただきます。」

接客のほか、厨房の手伝いから、掃除、洗濯など、裏方の仕事もローテーションでこなしています。

精神障害のある、ろくたさん、音声チックとって自分の意志とは関係なく声を発してしまう症状があり、裏方の仕事を選びました。ここにきて7年、皆の兄貴的な存在です。開店の後、テーブルのセッティング、ろくたさんはここに一番気を配ります。ナイフやフォークのわずかなゆがみも見落としません。

「お客様の立場で、自分の仕事をやっています。」

小さな作業の向こう側にお客の笑顔がある。

ほのぼの屋は2002年、地元の社会福祉法人としてできました。以前から運営していた作業所では企業の下請けの仕事が多く、当時の一人あたりの月収はわずか1万円程度でした。

(西澤)「なかなか一般就職できない地域の事情もあって、作業所を作ることになった。でもきちっと給料を払っていかないといけない。給料を払うためには企業として成り立たせないといけない。」

もっと給料が欲しい、そんな彼らの願いをかなえるように自治体の補助金や市民の支持を受け、ほのぼの屋はスタートしたのです。

シェフの糸井さん、一流ホテルの副料理長を務めた後に独立、20年続いた店をたたみ、ここにやってきました。

(糸井)「姉が知的障害があり、福祉の世界も小さい時から知ってましたし、福祉でお世話になったので、その恩返しをしたい気持ちがありました。」

最も高いディナーのコースで12,000円。

目も舌も肥えている40代から60代の女性をターゲットにしたところ、予想以上に口コミで広がり、年間の売り上げは5000万円に達しています。

(西澤)「実際は僕たちはレストランを経営するのが精いっぱい、彼、彼女たちをフォローできなかった。そのできなかったことが良かったと思う。」

彼らは、自分にできることを見つけて行動しました。

仕事を与えられるのではなく、主体的に働くように変わっていったのです。

給料日がきました。

「6000円～8000円はすぐにとびます。」

給料はレストランへの貢献度を15項目でチェックし、その評価が自給に直結する仕組みになっています。

ろくたさんは先月、一つの夢をかなえました。

これまで同居していた家族から独立し、アパート住まいを始めたのです。

ろくたさんは、ほのぼの屋で働いていたこずえさんと職場結婚をし、3人目の子どもが春に生まれる予定です。

今月の給料は11万。障害者年金は夫婦で月15万あるので、子どもの将来のために貯金もできるようになりました。

(ろくた)「やっぱり、評価されると自身にもなりますし、子どもが生まれてから、これからまだまだ頑張りたいと思っているんで、自分が病気を持っていても仕事として表現できる場所があるのは良いつて思ってます。」

中学生のころに精神障害の症状が出始めたろくたさん。学校になじめず、自宅に引きこもり、精神科病院への入退院を繰り返しました。

(母)「障害持ってるから、これからどうする？自殺する？そんな時期もあったのでつらかった。今は違いますね。よかったです。」

未来を描いて働くことで、失われていた自信がもう一度はぐくまれていきます。

障害者の働く環境をいかに作るか。施設のあり方が今問われています。

～ビデオ終了～

こんな雰囲気ではみんなとレストランをさせていただいているんですけども、11年前、オープンの前っていうのはね、レストランを作ろうっていったんですけども、レストランごっこでは、あかんやろ。障害持っている人たちが一生懸命頑張ってやっていますから、お涙ちょうだいで食べにきてくださいよ。そんなレストランではあかんやろ。ちゃんと市場で通用するようなものにしよう。ちょっとおこがましいけど、一流目指そうやないか。と、みんなで誓い合って、研修を重ねて、何日も徹夜で準備して、いよいよオープンの日を迎えました。

果たして、お客さんは来てくれるんやろか。そんな心配もしたんですけども、蓋を開けてみますと、連日、連夜満員。丘に上がったところにあるんですけども、車が渋滞してですね、下に京都府の府道があるんですけども、そこまで渋滞してしまうようなことになりました。1時間待ち、2時間待ち、3時間待ち、今日のランチは終了しました。そんな状況が続きました。ディナーにつきましても、3ヶ月先まで予約を承っているんですけども、そこまで予約が一杯。次の月になるとまた、一杯になる。ず〜っと予約がうまっていくみたいだね、そんな状況になりました。今、年間で5000万円から7000万円、8000万円弱まで売り上げが推移しているんですけども、11年で15万人を超える方にお食事を召し上がっていただきまして、ウェディングにつきましては300組を超える人にこのほのぼの屋で式を挙げていただいております。もし、この中でご結婚をお考えの方がございましたら、いつでも。相手探しまではようしませんけども、結婚式のコーディネートは、責任を持ってさせていただきます。いつでも言うてください。



舞鶴湾を一望できるロケーションなんですけれども、実は、ほのぼの屋が建っている土地は借地なんです。レストランを作るときに、どこがええやろ？と、あちこち探しまわって、見つけて、この土地なんとか使えんかなあとということで、地主さんを探してですね、「あの土地にレストラン建てさせてほしい」とお願いに行ったんですけれども、「買うてくれるんか？」「そんな金はないから、貸してくれ」と借地の上に、借景ですね。借り物ばかりなんですけれども、そんなロケーションの所で仕事をしております。

地域の反対は本当にたくさんありました。もともとが、精神障害者の社会福祉施設ができる。地元の方に説明会をするんですけれども、ちょうどその直前に池田小学校の事件がございました。精神科に通院をしている人が、大事件を引き起こしてしまった。新聞報道のあり方も本当にひどかったんですけれども、そんなことがあったから、「精神障害の施設、どんなやつらが来るんやろ？」みたいなことを、随分言われました。たくさんの方の反対意見があったんですけれども、繰り返し、繰り返し、説明をさせていただく中で、ちょっとずつ理解はしていただけるようになりました。「あんたの言うことはよくわかる。精神に障害のある人はそういうものが必要なのもよくわかる。ようわかったけど、なんでうちのすぐ近くに作るねん？」という反対ですね。でも、地域の役員さんが「もうええやないか。作らしたろうやないか。」ということで、進めていただくことができて、建設が始まってまいりました。建設が始まって、地域の方に「もし、なんかありましたら、いつでも連絡してください」私の携帯電話の番号を、皆さんにオープンにしていたんですね。そしたら、皆安心して、かけてけえへんと思ってたんです。そんなことはない、かかってくる、かかってくる。毎日のように、電話がかかってくるんです。「工事の車両の速度は時速20キロ以下って決めてたのに、今日のダンプは25キロはでた」「すみませんでした」と行くんです。「あんたのところのダンプが、うちの家の前に大きな岩を落としていきよった。」あわてて飛んで行って見ますと、直径3センチくらいの岩。そんな感じで、地域の方とうまくやっていくのは、難しいと思ってたんです。それでもなんとか建設が終わりまして、オープンの前に、地域の方に、できましたよ！というかたちで、ご案内をさせていただきました。50名ほど来ていただきまして、皆さんから質問や意見をお受けしたら、また怒られるやろな、と思ってたんで、作戦を考えました。皆さんに、質問や意見を言うてもらわない方法。私が一方的にしゃべる。その後、「食事の準備ができましたのでどうぞ！」言うて、食事を食べてもらって、とことんしゃべってもらわずに、機嫌よう帰ってもらおう、という作戦を考えたとですね。

前半はうまくいきました。30分ぐらいは、もう、一方的にしゃべり倒しました。「食事の準備ができましたので、どうぞ！」までは、うまいこといったんです。うっかりしていました。フランス料理なんです。コース料理というのは、お皿とお皿のあいだに間がありますよね。人間、間（ま）があるとしゃべるんです。聞こえてきたのが、「こんなご馳走までいただいてんねんから、後でみんなで意見とか質問とか言い合おう」ってね。「あっ！」

食事が終わってから、皆さんお集まりいただいて、前で（あ～怒られるんやな～）って下向いて立っておりましたが、中ほどの方が、突然立ち上がって、「ほな、わしから意見言うで！」ちらっと見ますと、地域の中で、一番反対されていた方だったんですね。また、ワインも随分召しあがっていただきまして、顔も真っ赤なんですね。「あんたが精神障害の施設ができる言うて、どんなものができるかと思ったら、こんなええもんができるんやったら、ちゃんと説明してくれとったら、わし、反対せえへんかったのに！」と怒鳴らはるんです。下向きながら、（ほめられてんのやろか？怒られてんのやろか？）判断するのに数分かかったんですけれども、どうもご理解いただいてるみたい。ちゃんと説明したつもりなんですけどね。精神障害の施設と、レストラン、皆さんイメージができなかったけど、やっと現物ができて、「あ、こんな物になったんやな」ってことをご理解いただいたんだと思います。発言された方も、「僕もこんな風に使ってみたい」「私もこんな風に使ってみたい」と、非常に好意的な意見が圧倒的でした。その時の建設前のクレーマーがお店の常連客、リピーターに変わって、「パンフレットなくなったからくれ」言うて「何しますの？」「宣伝するんや」って、クレーマーがリピーターに変わって、リピーターが今やサポーターに変わっているという状況になります。ただ、中で何やってるかわからんようなものを作ったら、不信感があると思うんです。でも、どこから見てもレストランやってるのは丸わかりですので、そういう意味で、地域の中で開かれた形になったのが、皆さんの不信感のようなものを取り払うことができたんじゃないかと思います。

お腹すいてまいりました頃に、目の毒ですけれども、これがうちの6,000円のディナーのコースでございます。ちょっと見にくいですけど、右上はアワビのステーキ、うちのアワビのステーキ柔らかいですよ。歯の悪い方でもすうっと食べられます。それから、フィレ肉のステーキ(の写真)が消えてますね。これはうちの名物なんですけれども、伊勢海老のビスクスープ、濃厚な伊勢海老からとりましただしを、このスープにふんだんに使っております。本当に高価なものなんですけれども、嘘やと思ったら食べに来てください。おいしいです。

先ほどのVTRにもありました、うちの料理長、糸井和夫と申します。京都でお店を20年やってました。その前の20年は、志摩観光ホテル、華麗なる一族の舞台になった、ドラマありましたね。その舞台になったのが、志摩観光ホテル。そこで、副料理長もやっていたんです。フランスに修行にも行っております。関西ではトップクラスのフレンチのシェフがうちで腕をふるっていただいております。

さて、うちのメンバーなんですけれども、大きくはホールを担当しております、接客をしておりますメンバー、それから、糸井とともに調理を担当しておりますメンバー、それから洗い場、フランス料理っていうのは、お皿の上にお皿が乗ってて、その上にまたお皿が乗ってるみたいな、だから毎日洗い場は戦場です。本当にたいへんですがここは障害を持っているメンバーだけでまわしています。それからバックヤードの仕事。テーブルクロスですとか、ナプキンですとか、おしぼりですとか、またそのアイロンがけ、それから

レストラン全般の掃除ですとか、そういった裏方の仕事なんですけど、これがたくさんあります。これをみんなローテーション組みながら、分担をしてやっております。

今現在ですけども、時給の方が420円。一番多い人が1020円。数名ですけど、多い方で手取りが15万位、お支払いができるようになっていきます。うちで働いてもらってますパートさんよりも、実は給料高いんです。

オープン当初、ものすごい方が押し寄せて来られる状況で、我々はシュミレーション、研修をしてきたんですけども、いざ本番となりますと、そんなシュミレーションなんかは、全然役に立たん状況でありました。とにかく、押し寄せて来られるお客様をどういう風にしていくかだけを考えて、一日中立ちっぱなしで、レストランやっつきながら、食事をとる時間もなくて、9時までが営業時間ですけども、9時にお客さんは全然帰ってくれなくて、いつも10時くらいになってようやくみなさんお帰りいただいて、そこから片づけをして12時。次の日の段取りをして2時、3時。そこから家に帰って4時か5時には出てきますという生活をずーっとしていました。ですので、ほとんど最初の数か月の記憶がないんです。覚えてるのが、車で家にかえるんですけども、帰りながら（なんで俺帰ってるんやろ？2時間ほどしたら、また来なあかんのに…）（このままハンドル切ったら楽になれるのかな…）とかね、（人はこうやって病気になっていくんや…）とか考えていたんで、実は私たちは、本来はここで働く障害を持っている人たちを支援するのが仕事なんですけど、レストランをまわすのに手一杯、自分の命を守るのに手一杯、そういった状況でした。結果的にそれが良かったんですね。障害を持っている人たちがみんな、一人ひとりが考えました。何考えたか？（今何したら良いんやろ？）（次、何したら良いんやろ？）みんなそれぞれのペースなんですけども、考えて考えて考えて考えた上で、それを行動に移していきました。その瞬間からレストランになくってはならない戦力に変わっていくわけですよ。そうやって、1人戦力に加わり、2人戦力に加わって、何ヶ月か経過した頃に、レストランが機能的にまわるようになっていきました。私は死なずにすんだわけですけども、そんな彼らの中の1人が、ちょうど1年を経過した頃、「今までいろんな仕事をやってきたんですけど、生まれて初めて自分の仕事に誇りが持てる。」と語ってくれた。聞いた瞬間みなで喜び合えたんですけども、ちょっと待てよ？その彼は、古本屋の仕事は機嫌ようにやっていたんですよ。その仕事には誇りを持ってないのに、レストランの仕事には誇りが持てる、何が違うのかな？と考えたときに、ひょっとしたら、機嫌ようにやっているように見えて、前の仕事は、あてがわれている仕事であったり、させられている仕事だったのかもしれない。ここは、残念なことに、だれも仕事を教えてくれへんのです。自分で仕事を探して、自分で動いていかなあかんわけです。自ら働くからこそ、自分の仕事に誇りが持てるって言ってくれたんじゃないかと思います。

これは、障害があろうとなかろうとそうですよね。誰だってそうです。働かされたり、あてがわれたりという仕事では誇りがもてないんじゃないかなと、でも自らが「自分はこれをやろう」と思って働くから、その仕事に誇りが持てるんじゃないかな、と思いました。

リハビリテーションという言葉があります。よく機能回復という意味で使いますけれども、この言葉には、人権の回復、人としての尊厳の回復という意味もあるそうです。私たちは何もしてないんですけども、彼ら自身が、自ら働くことによって、失っていた自信、失いかけていた人としての誇りを、自ら働く中で取り戻していく。まさにやっていることが、リハビリテーションの場になったかなと思っております。

我々援助者っていうのは、彼らをしっかりと見ていく過程で、しっかり根を張っていかないと、芽を出し、花を咲かせることはできません。残念ながら、この日本の土はまだまだ痩せて枯れているんです。でも、我々がやったことは、その痩せて枯れている土を一鍬一鍬耕していった。それによって、彼らはしっかりと根を張って、芽を出し葉をつけ、花を咲かせ、実を実らしていくことができいくんじゃないかな、そんな思いでこれからも鍬を奮って行きたいなと思います。

写真がばらばらですが、2006年に自立支援法ができたことで、彼らは働きに行くのにお金を払わないといけなくなってしまいましたので、それをなんとかしようと、私たちは考えました。「もっと売上げを伸ばしていこう。利用料については給料に上乘せしよう。それだけやったら面白くないから、給料をなんとか上げていけるようにしようじゃないか。」

そのため、新しい事業でオーベルジュぼの、舌嚙みそうですけど、「オーベルジュ」っていうのはフランスの小さな宿屋のことです。「ぼの」はほのぼの屋のぼの。小さな小さなホテルを作りました。うちの敷地の隣にあるんですけども、ここが1日限定2組と書いてますが、なんで2組かと言いますと、2部屋しかないからです。本当に小さなホテルです。1泊2食、平日でお一人様20,000円から。内訳言うておきますね。20,000円の内、10,000円がディナーです。コースがついてます。それからなかなか広い素敵なお部屋なんです。朝ごはんは、わざわざお客様のために、シェフ自らが朝ごはんを作りにきます。それが20,000円言うたら、ちょっと香住に蟹食べに行こか、で20,000円位します。それやったら、うちに来てください。「姫路で西澤の話聞きました」と連絡していただきましたら、2,000円位割引させていただきます。それから、福祉の業界でこういうことをさせていただいていますので、守秘義務がありますので、どなたと来られても、黙っておきます。ぜひ、ご利用いただければと思います。

それから、米屋もやっています。給料、米屋ができるまで5,000円やったんです。米屋が出来て、2万円に跳ね上がりました。営業トーク、営業スマイル、2万円、5万円、8万円、10万円言うて、2万円を超えたところに営業トーク、営業スマイルに加えて、残業をいとわなくなる。しんどいけど頑張る。5万円をもらえると、生活の幅が変わっていく。それまでは、お小遣いをもらうという人が、自分のお金を自分で管理できるようになっていくのが5万円なんだろうな。そうしますと、生活が変わっていきます。8万円を超えたときに、自分の夢やとか、自分のビジョンというのを語るようになって、それを実行に移していきました。

ほのぼの屋で2組のカップルが誕生しました。それから、1人暮らしを始めるとか、自分の家を建てるための貯金を始めるとか、そんな風に自分の夢を語って、実行に移していったのが8万円。10万円を超えたときに、もう一度働き方が変わりました。びっくりしました。10万円を超えた数人が、突如として、リーダーシップを発揮してきました。今、古本屋の仕事、我々は、ほとんど何も知りません。10万円を超えた彼らが、仕事のマネジメントをしています。今日、私ここに来てますが、朝、朝礼はないんですけれども、「〇〇さん、△△さんは、朝この仕事をしてください」「お昼のお客様の予約はこういう状況やから、〇番テーブルと、△番テーブルはこういうセッティングをしてください。そうすると、テーブルクロスが足りなくなりますから、□□さんは、特急で〇時までにはテーブルクロスをしあげてください」といった、全体のマネジメントを彼らがするようになりました。まさに、私支配人が支配されている側が変わってしまっているんですけれども、「西澤のサービスは、ちょっと泥臭いから、お客さんの前に出るのは控えてもらおうか。」みたいなことまで言われているんですけどもね。本当にプロフェッショナルに変わってまいりました。

昨年、10周年を迎えまして、ユニフォームを一新しました。以前は白のブラウスにスカーフだったんですけども、ホール担当のメンバーに聞きました。「どんなユニフォームが良い？」とといいますと、写真右から2人目がうちの店長で、ベストを着て蝶ネクタイをしてたんですね。「店長みたいな服が良い」結果、全員店長になりました。

繰り返しになりますが、自ら働くことが大事なんだということがわかりました。それでいて、初めて人生の主人公になっていくんだらう、自ら生きる、主体的に生きる環境を作っていくかないといけないなっていうのは、私たちも一緒です。

まだまだ、Decent Workに至るまでは不十分かもしれませんが、Decent Workの入り口に來れたんじゃないかなと思っています。

時間をオーバーしましたが、これで私の話としたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。